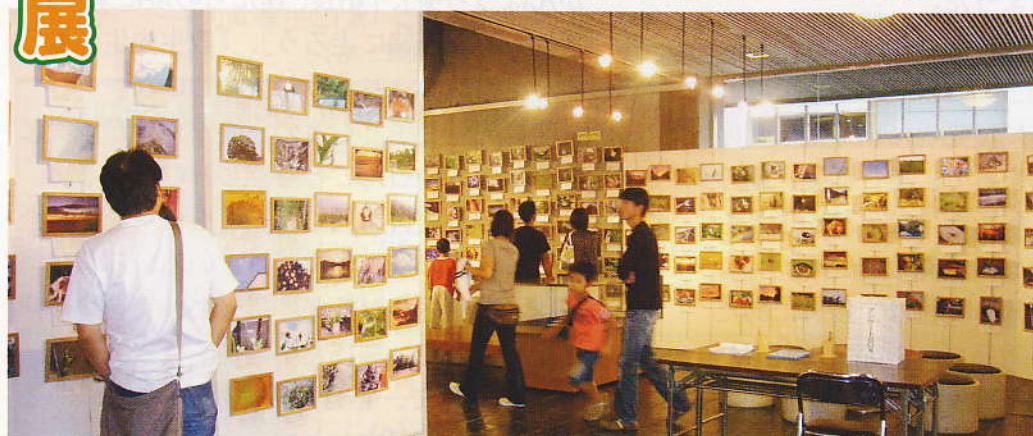


館報 教育記念館

No. 71
平成20年10月 発行

「子どもの目・自然不思議発見」 こどもたちの 大写真展



わたしの作品がすっかりなくなっ
ていてびっくりしました。らい
年も作品を送りたいです。

主な内容

- ◎教育時評 富山県小学校長会 会長 大岩 久七 2
- ◎財団事業、今後の予定 3
- ◎恒例展「富山県版造形教育作品展」「マセマティカル・ワールド展」
「きらめき未来塾」..... 4
- ◎特別展「富山県の学校給食 90年の歩み」 5
- ◎第18回 郷土の先賢顕彰者 ●黒川 良安 ●青柳 石城 6
●川島甚平衛 ●継続顕彰者 7
- ◎恒例展「子どもの目・自然不思議発見写真展」 あとがき 8



発行所／財団法人 富山県ひとづくり財団 富山県教育記念館 〒930-0018 富山市千歳町 1-5-1
TEL (076) 444-2000 FAX (076) 444-2001 E-mail: toyama@t-hito.or.jp http://www.t-hito.or.jp
(教育記念館会議室ご利用の場合 ☎ (076) 433-2770)
発行人／富山県教育記念館 館長 齊藤和夫 印刷所／いおさき印刷株式会社



教育実習雑感

富山県小学校長会

会長 大岩 久七

9月4日、富山大学人間発達科学部の2、3年次生50名を迎えて、毎年恒例の堀川小学校での教育実習がはじまった。教生先生として、各教室に2ないし3名が配属され、慣れない生活と学校のスタイルに不安や戸惑いを感じながらの3週間だ。

そんな不安を振り払うかのように、開講式での呼名に対する一人一の返事や学生代表の言葉には、力強さがあり、教育実習に臨む決意がみなぎっているようだ。

この時期、いつも残暑が厳しく、汗が止まらないのだが、教生先生は決して労を厭わず、全校児童が一斉に運動場に出て走る朝のトレーニングにはじまって、美化活動、朝の会、さらに授業と、多彩な学校生活を子どもと共にエネルギーに展開していく。

さらに、子どもが帰った後は、指導にあたる担任と一緒に、各教室で一日の実習を振り返るとともに、明日への準備を行う。日が暮れた頃、校舎を回り、研修に励む教生先生に声をかけると、「元気です」「ありがとうございます。頑張ります」などと、笑顔で気持ちのよい返答がくる。どこまでも健気な実習生の姿にふといとおしさを感じる。

後日、教生先生の公開授業があったが、発表したいと意気込む子どもたちのためにも頑張ろうとする教生先生の姿があった。1年生、道徳「すもう」の話し合いの授業が終わる直前、今まで発言したことがないF君が声を震わせ泣きそうになりながらも、「今まで本気でぶつかっていなかったかもしれない。今度は思い切ってぶつかるように頑張る」と発言した。共感した教生先生はF君の思いをまわ

りになんとか響かせようとしたが、結局は叶わなかった。授業後、「子どもたちの思いをもっと引き出すことができたか…」と思わず大粒の涙を流し担任に話す教生先生のもとに子どもたちは駆け寄っていったのである。

日を追うごとに、教生先生と子どもたちの触れ合いには親しさや信頼が増していった。廊下で思わず聞いた両者の会話には、「先生、黒板の字、まちがわれんな」「ありがとう、がんばっちゃ」「給食、僕たちの班に来て」「朝トレ、一緒に走ろう」「教生先生、もうすぐ実習終わっちゃうね、寂しいな」…。

教生先生と子どもとの心の繋がりが確実に強くなっていったことを感じるのである。

この教育実習を通し、子ども理解を深めたり、子どもの姿に学んだりといろいろな体験を重ねたと思われるが、最後に、実習生の声を記すことで、結びとしたい。

この実習で、私は子どもたちの中にある「熱意」や「夢中」という心を教えてもらった。だから、教師も真正面からぶつかっていかなくてはならないのだ。このことは、何度先生から言われても実感できなかったことができた。とても嬉しい。10月から再び大学に戻り、おそらくまた純粋な一生懸命さを失っていくだろう。だが、子どもたちから教わった情熱を基に努力し、教師になりたい。情熱をもった教師になりたい。

実習生の意気込みを素直に受け止め、改めて、教育実習の重要性を感じている。

元気な地域づくり活動を行う人材の育成及び支援事業

主催 財団法人富山県ひとづくり財団

平成20年度「学ぼう！ふるさと未来」支援事業（助成対象校1校に10万円助成）

— 将来にわたって、ふるさとを愛し、ふるさとに誇りをもつ子どもの育成を願い、
地域と連携して「ふるさと学習」に取り組む学校を支援します —

助 成 校	研 究 主 題
上市町立南加積小学校	進んで人や自然・地域・事象に働きかけ、自分らしく表現し、互いにかかわり合う児童の育成
立山町立立山芦峯小学校	郷土を愛し、心豊かに、たくましく生きる子供の育成 — 一人一人がよさを生かし、生き生きと自己表現 できるため教師の支援はどうあればよいか —
富山市立上滝小学校	自分もよくてみんなもよいを实践できる子供の育成 — かかわり力の育成 —
富山市立速星小学校	一人一人が学ぶ楽しさを味わい、共に高め合う子供の育成を目指して — 人や地域に豊かにかかわりながら自ら働きかけ、 よりよく生きる子供の育成 —
砺波市立庄南小学校	種もみづくりやチューリップの土を生かした地場産業について、その歴史や人々の営みに学び、進んでかかわり、ふるさと庄南を愛する心を育てる。

平成20年度「水みらいプロジェクト」支援事業（富山県ひとづくり財団及び富山・水・文化の財団から各五万円助成）

— 小中学生に「水」に関する学習や調査活動を通して、「水」に対しての興味を高め、
「水・環境」の大切さを認識する実践に取り組む学校及び団体を支援します —

助成校、助成団体	研 究 テ ー マ
魚津市立村木小学校	鴨川を探る
射水市立大門小学校	大切にしよう ふるさとの川
くろべ水の少年団	郷土の水環境を調べる
氷見市立女良小学校	女良の宝 蛇が島
高岡市立二塚小学校	二塚地区の環境から考え、活動する
富山市立三成中学校	常願寺川の治水と利水
砺波市立庄川小学校	庄川とともに生きる

4月に開催される「県小・中校長会」にて、上記支援事業の実施要項を配布しています。

平成20年度後半の展示予定

○第26回「みんながんばってます作品展」	11月1日(土)～11月16日(日)
○第20回「富山県造形教育作品展」	11月22日(土)～12月7日(日)
○第4回「アイディアロボットフェスタ・ロボット展」	12月13日(土)～1月25日(日)
○第19回「富山県中学校美術展」	2月7日(土)～2月22日(日)
○「富山大学学生卒業記念書展」	2月28日(土)～3月6日(金)
○第2回「富山県版造形教育作品展・秀作回顧展」	3月14日(土)～4月12日(日)

《特別展》

富山県の学校給食 90年の歩み

4月26日(土)～6月8日(日)

富山県での学校給食は90有余年前の大正時代初期、洪水が多く発生した地域を主に、子供たちの防寒養護と栄養補給をねらいとして冬季温汁給食が始められ、徐々に県下一円に広がっていった。

その後、世界的な不況や不穏な情勢などを背景に給食のねらいが強健な身体づくりへ変わっていったり、太平洋戦争後には体位の向上を目指したりした。しかし、戦後の経済的発展とともに子供を取り巻く「食」は、種類や量の面では豊かになり、体位は著しく向上したが、質的には偏りが見られ、肥満の傾向や体力の低下のみならず、精神面でも課題が指摘されるようになった。

子供たちの心身共に健やかな成長を願うとき、学校給食が果たす役割の大きさに改めて気づかされ、その充実・発展に一層期待するばかりである。

当財団では県内教職員の協力を得て、研究紀要「富山県の学校給食 90年の歩み」を刊行した。この特別展はその内容を元に企画・展示したものである。

富山県教育記念館 館長 齊藤 和夫

展示パネル内容

- ・時代の流れと学校給食
- ・富山県小学6年生の身長・体重の変化
- ・給食指導の移り変わり1、2
- ・献立の移り変わり1、2
- ・給食時間から見える子供の食
- ・学校給食の啓発活動
- ・現在の衛生管理
- ・給食費の状況
- ・学校給食を取り巻く課題と今後への動き
- ・座談会－学校給食の思い出とこれから－
- ・学校給食に関する調査
- ・地場産学校給食料理



懐かしい給食調理器材



脱脂粉乳容器



大釜

- 現在、栄養士を目指している短大生です。食育への取り組みがいろいろ紹介されており、参考になりました。
- 小学生のころを思い出し懐かしかったです。給食をサンプルで再現されたり、実際使用されていた鍋などの展示がよいと思いました。
- 給食の歴史や現在の給食の取り組みがよくわかりました。

富山県教育記念館 研究紀要

「富山県の学校給食 90年の歩み」平成20年3月発行

執筆者（健康・スポーツ部会専門委員）

森本 清隆、永田 眞理、山本 悦子、大郷 民子、白川 洋子
林 裕子、笹原 康子、野村久美子、根塚 静枝、清涼 慶子

第26回 富山県版造形教育作品展



○特選の「さかあがり」、幼稚園児の「ぼくのかお」ただただ感激です。当方60代後半なれども幼き頃に戻った思い、心の中が洗われる思いです。いい作品に出会えて感激です。

○出してもらってうれしかった。いろいろな絵があって、うまい人のうまい所をぬすみたいです。

きらめき未来塾（夏休み期間中）



開講式
八木近直塾長あいさつ



スペシャル道場
講師 秋山 仁
(数学者、東海大学教授)



思考道場
県内講師（土肥和美、岡本薫、
城下晴美、藤森一彰、森雅美）



お笑い道場
講師 三遊亭 圓窓
(落語家)



右脳活用道場
講師 ねじめ 正一
(詩人、作家)



日本語道場
講師 高梨 敬一郎
(関西国際大学客員教授、
元NHKアナウンサー)

マセマティカルワールド展

思考道場に参加するために記念館にはじめてきました。思考道場のテーマと連動していて、子供も興味しんしんに見ておりました。中でも、サッカーボールの展開図にはまってしまって、私（親）は子供のように夢中になって作ってみました。そして、とどめは、フェルトで展開図を利用して、サッカーボールのクッションを子供に作らせ、自由研究の作品として学校に提出予定です。おかげで少しですが算数（数学）脳になりました。ありがとうございました。（思考道場参加者の親より）



第18回 郷土先賢室顕彰者紹介

北陸近代医学・科学の祖



くろかわ まさ やす
黒川 良安

(1817~1890)

良安は、文化14年(1817)新川郡山加積村(現在の上市町)黒川の医師の家に生まれた。12歳の時、両親とともに医学の修行のため長崎に赴く。父はシーボルトに学び、7年後母と帰国。富山藩の藩医となる。しかし、良安は長崎に残り蘭学と医学の修行を続けた。天保大飢饉の米不足による町奉行の帰国令にも甘藷を食べて長崎に居座ったとの逸話がある。この頃、砲術家として知られる高島秋帆と深い交流があり、燐の生成を試みたとも言われる。

天保11年(1840)一旦帰国するが、向学止まず、適塾の緒方洪庵の勧めで江戸に上り、蘭医坪井信道に入門。「才・徳・志」が揃ったまれな人物と絶賛され、塾頭となり、5年間を過ごした。この間、日本初の脳髓の解剖を行うなど蘭方の第一人者としての名を高めた。在学中、佐久間象山とは蘭学を教え、漢学を学ぶ間柄となって親交を深め、象山から松代藩への誘いを受けるが、弘化3年(1846)加賀藩医に迎えられ、やがて、藩主の侍医となった。

当時は天然痘がしばしば猛威をふるい、命を奪われなくとも、ひどく痘瘡の跡が残る、人々を苦しめた。ジェンナーの種痘が日本に伝わり、やがて良安のもとにも届いた。良安はこれをジェンナー同様、実子誠一郎で試している。数年を経てその効果が定まると、加賀藩は元治元年(1862)に良安を頭取として金沢に種痘所を設立。これが金沢大学医学部の淵源とされる。続いて貧民救済と医学研究を目的に慶応3年(1867)卯辰山に良安を主付とする養生所を開設。さらに長崎で医学や医局経営を学ばせ、明治3年(1870)金沢藩医学館を開くと、総督医に任じ、医療と教育の中心的な指導者とした。

良安は医学ばかりでなく、突出した語学力により広く近代科学に通じていた。豪商銭屋五兵衛がかかわる河北潟の毒流し疑惑に、日本で最初の水質検査を行い、科学的な検証や対策を示したこともある。また、子弟の育成、蘭学・科学の普及に努め、門人数百人に達するとも言われる。

良安の弛まぬ研鑽と常に温和で人の非を語らない人となりに学び、科学者としての心構えを受け継いだ人々が北陸を医療や医学研究、科学の先進地にしたのである。良安は、まさに、北陸近代医学・科学の先覚者である。

明治4年(1871)、医学館を辞した良安は、多くの弟子たちに蘭学を教えながら、やがて悠々自適の日々を送った。

明治18年(1885)東京に居を移し、明治23年(1890)病を得て73歳で死去。顕彰碑が故郷上市町に、また、レリーフが金沢大学医学部教育棟に掲げられ医学を志す人々に厳しくも優しい眼差しを向けている。

専門委員 本村 雅宏

いしづえ 本県書道教育の礎を築いた書家



あらい やぎ せき じょう
青柳 石城

(1899~1977)

青柳石城(本名政治)は、明治32年(1899)群馬県上川淵村(現在の前橋市)に生まれた。書との出会いは、尋常小学校2年のときにさかのぼり、先生から初めて筆を持つことを教わって「二」と「十」の字を書いたとき、2字とも三重の赤丸をつけて黒板に張り出され、ほめられたことにある。

書に深い関心を抱き、群馬師範学校在学中から文部省教員検定試験(文検)を念頭に置いていた石城は、最初に赴任した小学校の2年目ごろから、本格的に受験準備を始めるとともに、著名な二人の師につき猛勉強をした。

難関の文検習字科に合格した石城は空席が生じていた本県の教員に就任することになり、大正14年(1925)3月末、富山駅に降り立った。26歳であった。辞令は「富山県立富山高等女学校兼富山県女子師範学校教諭、堀川尋常高等小学校訓導」の内容であった。

教員として書道教育に専念できるようになると、石城は書家として作品制作に打ち込むと同時に、書道文化の普及に強い関心を抱くようになった。自らの書の道と教師の役割との調和をどう保っていくかを思いめぐみながら、昭和4年(1929)日本書道作振展覧会を女子師範学校にて開催し、富山県の書道人口増加の足がかりを作った。また、昭和7年(1932)、県内の書家を糾合して、北辰書道会を結成し、機関誌「臨池」を創刊した。その後、書家として最初の個展を開催した。また、昭和12年(1937)、大日本書道院(日展の前身)第一回展にて特選を受賞した。この栄誉により、石城は、書家、書道教育家としての自分なりの指標をもつことができ、さらにその足場を固める信念が強まった。

昭和22年(1947)、婦負郡(現富山市)呉羽中学校校長に就任したが、わずか2年でその職を辞した。理由は、「私は責務の一端を終えたことでもあり、私自身のなさねばならないことが待ち構えているような気に迫られ、校長職を辞そうと決意した。私の選んだ道、書の道に帰る」ことであった。高校講師として書道教育に携わる一方、書作、自宅での書の指導に努めることになったのである。

こうした研鑽の日々の中で、石城は数多くの書道人を育成し、昭和41年(1966)、北陸書道院の設立によってそれが結実した。

石城が書展に応募したのは2回だけである。書作に専念していた石城であったが、自らは書展への出品を慎み、書道人の育成・書道教育に没頭し、ひたすら書道文化の普及に精魂を傾けたのである。昭和52年(1977)、「富山県書道界の慈父」と仰がれた石城は、78年の生涯を閉じた。

専門委員 平野 強

西陣織の技術改良に尽くした 実業家



初代 かわしま じんべえ
川島 甚兵衛

(1819~1879)

川島甚兵衛は、文政2年(1819)城端の呉服商上田屋の嫡子として生まれた。名を文次郎という。3歳の時父と死別し、母の実家城端川島村、林道屋九十郎方に引き取られた。9歳の時母が亡くなったため、苦勞を重ねたが、外祖母の慈愛と厳しい教育を受けてたくましく育った。

天保2年(1831)13歳にして志を立て、京都に出て、呉服商の店「紅粉屋」に奉公した。忠勤を励み、主人の信用を得て15歳で金庫番の要務を委ねられた。天保7年(1836)紅粉屋主人が亡くなったため主家が破産したが、受けた恩を忘れず主家のために働き生計を助けた。

天保14年(1843)25歳の時、京都六角室町末広路次に川島家を起こして、呉服悉皆業「上田屋」を開いた。また、城端へ帰郷し、林道屋九十郎の二男に城端上田屋を相続させるとともに先祖の供養を命じた。

西陣織の技術改良と品質の向上に努めていた甚兵衛は、当時研究していた六丈絹の製法を従妹に伝授し、城端、福光に普及させた。また、「手違御召」という新織物を案出し、西陣反物の織場を大阪にまで広めた。

甚兵衛は、世界にも大きく目を開き、安政5年(1858)日本が開国すると神戸通商司へ開港商社設立の誓願を行い、日本初の洋反貿易を開始した。

元治元年(1864)、店は禁門の変の兵火にかかるが、灰燼の中直ちに大阪に赴き大工を連れ帰って店を建て直し、5ヶ所の土蔵に保護しておいた商品をもとに商売を再開した。

事業に成功した甚兵衛は後継者教育に力を注ぎ、長男辯次郎(二代甚兵衛)を関東、信州、美濃各地の織物の買い入れに同行させ、実業教育を行った。また、辯次郎に古釘直しを命じたり、贅沢を戒めたりして、質素儉約を心掛けさせた。その一方、貧民に施米や施餅を行ったり、大政維新のために献金をしたり、永く町年寄役を務め、維新後は戸長を奉職したりと地域社会への奉仕を忘れなかった。

50歳にして家業を二代甚兵衛(16歳)に譲り仏事に専念した。明治12(1879)年3月15日遠逝する。61歳。

初代甚兵衛の意思であった織物技術・品質の向上、日韓の織物交易など世界への視野は二代甚兵衛に引き継がれていくこととなった。二代甚兵衛は、フランス・ゴブラン織の研究と美術織物製作に取り組み皇室技芸員となった。初代、二代甚兵衛によって礎を築かれた織物技術は、現在「株式会社川島織物セルコン」グループに引き継がれ、各種高級織物として全世界に提供されている。県内では、新川文化ホール、富山市芸術文化ホールを始め、多数の施設や学校に緞帳などが納められている。

専門委員 北川 奉秀

平成20年度も引き続き 顕彰される郷土先賢者

○現代舞踊の発展に努めた県舞踏会の 第一人者

可西 希代子(1925~1995)

高岡市東下関に生まれ、幼い頃から踊るのが好きであった。昭和21年、自宅で舞踊教室を開くが、飽きたらず上京し、大野弘史、和井内恭子夫妻に師事し、その後、舞踊研究所を設立。昭和35年には全国舞踊コンクールの現代舞踊コンクールの現代舞踊第1部、第2部で文部大臣賞を受賞。地域を題材にした創作舞踊公演、海外公演など舞踊界の発展に努め、40周年記念公演は文化庁芸術祭賞に輝いた。踊りにかけた熱い思いは、多くの後継者に受け継がれている。

○水力発電の実現に青春をかけた人

蜜田 孝吉(1872~1932)

売薬業を営む密田家の分家(兵蔵家)の長男として富山町(現富山市)に生まれる。本家の密田林蔵と協力して明治27年に開催された富山市設勸業博覧会で、電灯をともした。この時、青年実業家、金岡又左衛門と巡り会い、本格的な電気事業に取り組みはじめた。苦勞の末に、大久保村塩(現富山市塩)に水力発電所を定め、建設に反対する地域住民を説得し、明治32年4月、富山市に送電を開始した。「電気王国富山」への第一歩であった。その後も県下の電気事業に関わり続け、大きな功績を残し、昭和7年永眠した。

○呉羽梨の慈父

土池 弥次郎(1872~1956)

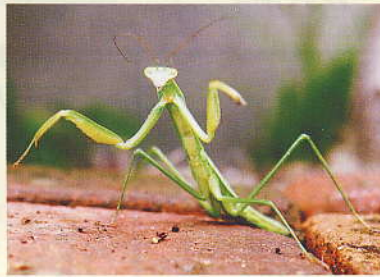
婦負郡西呉羽村(現富山市吉作)に生まれる。吉作一帯は水の便が悪く、日照りが続くと水不足に悩まされた。吉作の農業実行組合長を務めていた弥次郎は、稲に代わる作物を探し全国を視察中に「太平」という青梨品種に出会った。植えてみたが、甘みが少なく病虫害に弱い品種であった。次いで赤梨品種「長十郎」の試作に成功し、地域の人々にも熱心に栽培をすすめた。その後も病虫害、販路開拓、強制伐採、県外出荷中止などの苦難の道のは続いたが、常に栽培農家の中心となり困難を克服し、現在の一大梨産地の基礎を築いた。

9月21日(日)～10月12日(日)

「子どもの目・自然不思議発見写真展」



ぼくのミニトマト



オレと しょうぶ



鏡のような みくりが池



さばくに、いきたいな～



月にクレーターがうつっている



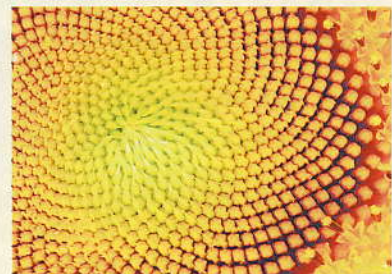
お母さんつばめは 大忙し



がんばれ！日本



「目」はっけん！



らせんじょうの ひまわりのたね



くつろぐ かえる



自然の花火



夕日



小学校72校、中学校5校より879点の応募があり、全作品を額装し展示。

あ・と・が・き

20年度前半の展示は、その概略を館報に掲載したよう
に来館者には好評でした。特に、「子どもの目・写真展」
では、応募段階から非常な盛り上がりで、うれしい悲鳴
をあげてしまいました。後半の展示についても各展覧会
テーマにふさわしい展示に心がけたいと思います。